

海洋深層水利用促進委員会 2023 佐渡大会報告

利用促進委員会

新型コロナ禍の影響で、遠隔開催が続いた当学会大会が、今年の佐渡大会では4年ぶりに対面と遠隔のハイブリッド開催となりました。これを受けて、全国利用者懇談会も急遽、ハイブリッドでの開催を決めました。本懇談会は本来、全国の取水地で日常的に海洋深層水を利活用されている方々の参加を主眼として開催しています。しかし全国各地にある海洋深層水の取水地から、年に一度とは言え遠路はるばる参加することは、実際には容易なことではありません。そこで新型コロナ禍の数少ない賜物として社会に普及した遠隔開催を佐渡大会で初めて試験的に導入してみました。遠隔会議のシステムは本懇談会の準備段階から非常に有効な手段となりました。開催地の佐渡市役所側のご理解の下、実に7回の打合せを重ねて準備することができました。

7回に渡る遠隔打合せをとおして、本懇談会の企画が練り上げられて行ったのですが、この際、佐渡大会だけで終わるのではなく、継続的に取り組めるテーマにしたいとの機運が高まりました。そこでまずは、新型コロナ禍が明けつつある今、「海洋深層水の利活用」について改めて考えてみようということになりました。

まず佐渡大会では「今、改めて考える海洋深層水利活用への期待」をテーマとして、海洋深層水に携わる各分野の専門家が抱く「期待」についてお話いただくことにしました。10月18日（水）、佐渡島の玄関口両津港に面する「あいぽーと佐渡」の催事スペースを会場として、4年ぶりの全国利用者懇談会が、現地と遠隔のハイブリッド形式で開催されました。

16時から始まった懇談会では、学識者を代表して海洋深層水利用学会の会長である大塚

耕司先生、取水者側から今年の開催地の佐渡市市役所の親松様、伊藤様。海洋深層水取水事業のパイオニアである室戸市市役所の山崎様にお話しいただいた後、海洋深層水利活用の理想的な活用方法である多段多量利用の順調な進捗でキラキラと輝きを魅せる富山県入善町役場の舟本様には、遠隔参加でお話しいただきました。最後に利用者側を代表して、海洋深層水利活用の典型として今日では久米島モデルと呼ばれる久米島海洋深層水協議会の鷺足様から、終了予定時刻の18時に至るまで、立場が異なる三者の皆さまから海洋深層水利活用に期待を込めてお話しいただきました。

4年ぶりの現地開催で、現地にお集まりいただいた参加者は20名程度に留まりましたが、遠隔での参加者が15名を数えました。遠隔開催の周知時間が極めて短かったことを考慮すると、今後、全国の取水地を介して利用者に周知できれば、これまでにないほど多くの参加者が望めると思われます。

なお本懇談会は、佐渡大会での「期待」を胸に、来年の開催に向けてトキのように、羽ばたいて行きたいと思います。



最後になりましたが、今年の本懇談会でお話しいただきました皆さまに改めてお礼申し上げます。